

日中交流史を 彩る 人 たち

日本と中国の歴史を遡っていくと、さまざまな場面で活躍した交流の担い手が見えてきます。今回の特集では、意外な分野でそれぞれの交流に関わってきた人たちの存在にスポットライトを当てることにしました。6名の筆者の方々には、そうした「日中交流史を彩る人たち」と筆者自身との関わりも含めてご執筆いただきました。

(編集部)

◆ 李建華・楊晶夫妻

日中の名エッセイを翻訳出版

「パイプのけむり」を中国語に

北京に行けば必ず連絡をとる友人の李建華・楊晶夫妻の横顔を紹介するのに、日中から二人の文人にご登場を願おうと思う。

まずは日中文化交流に大きな足跡を残された音楽家の團伊玖磨さん。1966年以来、60回以上の中国訪問を重ねられたが、2001年5月、旅先の蘇州で急逝されたのは記憶にまだ新しい。李・楊夫妻は團さんにとっても「良

き友」であった。團さんが自作オペラ「夕鶴」を携え訪中した79年5月、通訳として1カ月間、北京、天津、上海の公演に同行したのが楊晶さん。同じ年の暮れ、古代楽器「編鐘」を見たいという團さんにつき合って湖北省を訪ねたのは李建華さんだった。

「身近に接して先生のお人柄にひかれた」という幸せな出会いから始まった20年を超える交流は、あまりにも唐突にピリオドが打たれたのである。

その深い悲しみを超え、去年5月に

2人が翻訳出版したのが『煙斗隨筆』(北京・国際文化出版公司)だ。煙斗とはパイプのこと。そう、團さんの名随筆集「パイプのけむり」の中国語版だ。

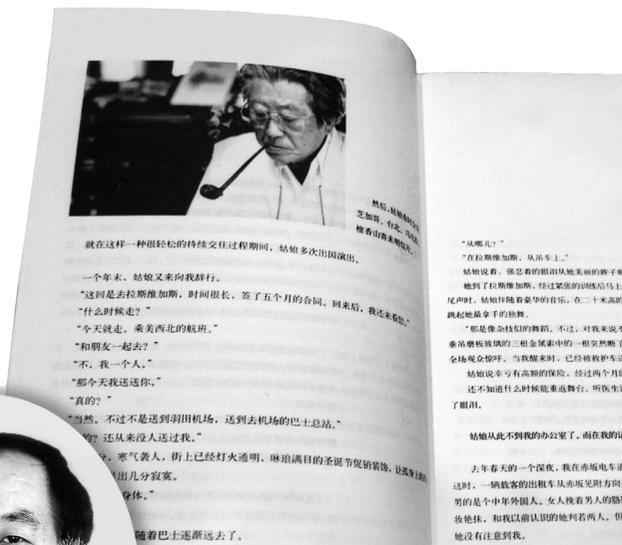
『アサヒグラフ』で64年に始まった連載は同誌が休刊した2000年まで1842回も続いた。

「私たちが翻訳させてもらうことになり珠玉の100編を選び出すため、先生が亡くなる8カ月前に訪中された際も、原著に目を通されて選んで下さったんです。でも、それが最後になると



加藤千洋
朝日新聞編集委員

かとう ひちろ ●東京外国語大学卒業。1972年朝日新聞社入社。80年中国・遼寧大学に留学。80年代半ば、90年代後半、北京特派員として約7年間を現地で過ごす。アジア総局長、中国総局長、外報部長などを歴任。2004年4月より「報道ステーション」(テレビ朝日系)のコメンテーター。主な著書に『胡同の記憶』『北京&東京』『加藤千洋の中国食紀行』など。一連の中国報道でポーン上田記念国際記者賞、朝日新聞連載『テロリストの軌跡』の企画で新聞協会賞受賞



↑李建華氏（丸写真）が夫人の楊晶さんと
いっしょに翻訳出版した『煙斗隨筆』。團
伊玖磨氏の名エッセイ「パイプのけむり」
から100編を選んで編んだもの

写真提供：筆者（以下も同じ）

は……」

こう思い出を語る楊晶さん

は中国で有数の日本語同時通訳者としても知られ、1年に四十数回、

シンポジウムや会議の場で日中のパイプ役を果たしている。

長春外国語学校で日本語を学ぶ

2人がなぜ日本語に堪能なのかを説明せねばなるまい。李さんは54年3月、楊さんは55年10月の長春の生まれ。ともに1日数時間の日本語授業があった長春外国語学校の小学部に学んだ。中国の外国語学校は60年代初めに周恩来総理の指示で全国に7校つくられ、北



復学を果たした。この

革後の外交をに
示だったようだ。

2人は72年には北京第二外国语学院に入学し、まもなく同じクラスになり、日本語をいっしょに学んだ。75年の卒業と同時に中国共産党の対外窓口である対外連絡部に配属された。国家の必要が優先される時代で、二人は「党官僚」になったのである。

李さんは対外連絡部の派遣で広島大学に留学（81〜83年）したし、東京の

京は英語とアラビア語、長春は日本語とロシア語というように、専攻が振り分けられたという。
66年に始まった文化大革命で正規の授業は中断するが、長春外国語学校の高校課程は70年には復活する。おそらく成績優秀だった18歳の李さんと16歳の楊さんも復学を果たした。この

大使館勤務（87〜89年）も経験した。その当時、楊さんも来日して東大大学院で日本史を研究。こうした経歴で2人の日本語と日本理解が一層深まったのは当然であろう。

中国作家のエッセイを日本語に

さて、ここらでもう1人、中国方の文人にも登場願おう。上海の芸術系の名門、上海演劇学院の学長職をなげうち、自由な立場での創作活動に入った中国当代の人気作家、余秋雨さん。1946年、浙江省の生まれだ。

ミレニアム到来が騒がれた99年末、私はニューデリー滞在中の余秋雨さんに中国文明と世界の諸文明の比較についてインタビューを試みた。当時、彼は香港のテレビ局の企画でローマ、アテネから北京までをジープで走破するという壮大な「文明の旅」の途上だった。その取材結果は2000年新春の朝日新聞紙面（1月6日朝刊「新世紀を語る」）に掲載されたのだが、いまでも印象的だった彼の指摘は例えば次のようなものだ。

「イスラエル、イラク、イラン、パキスタン、インドと古代文明の地の旅を

続けて来て、実はその道が『核ロード』であることに気づき、がく然としたのです」

この紙面企画は世界の代表的知識人に「文明の共生は可能か」というテーマで存分に語ってもらおうとの狙いだ

った。中国を担当することになった私
が、さて誰にしようかと悩んだ末に相
談したのが李さんと楊さんだった。「余
秋雨はいい人選だ。彼なら独自の目が
あるし、自分の考えを語れるから」と
2人に背中を押され、私はインドへ向

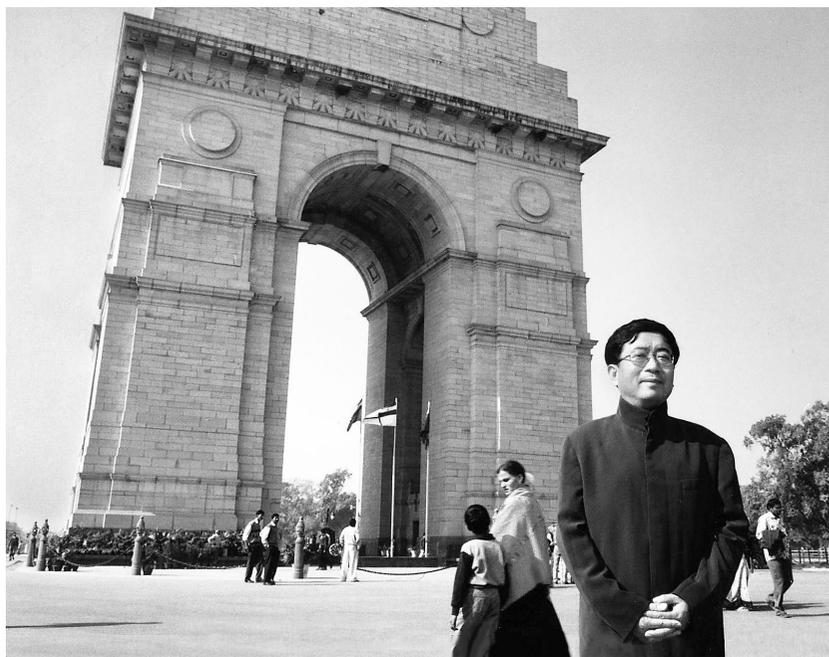
かった。

当時、夫妻は役人生活にピリオドを
打ち、李さんは王府井のビルに事務所
を構え、日中間のさまざまな交流の橋
渡しをする「北京東方之星」という会
社を設立。楊さんはフリーランスで通
訳と翻訳活動に力を入れていた。

その彼女の最新作が05年11月、日本
で出版された。余秋雨さんの散文集
『文化苦旅』（東京・阿部出版）だ。中
国語の原著を今度は楊さんが日本語訳
したのだ。大したものだ。

余秋雨作品は中国大陸だけでなく台
湾や香港、東南アジアの華人文化圏で
広範な読者を得ている。楊さんは99年
の余さんの「文明の旅」の報告記『千年
一嘆』（阿部出版）も共訳出版している。
夫妻は中国の人気作家の存在を日本
に知らしめるバイオニア的な仕事に挑
戦する一方、「日本の随筆文学の傑作」
（辻井喬さんの評）の『パイプのけむり』
を、ぜひ中国の読者に読んでもらおう
と願っているのだ。

ところで日中2人の名散文家は20年
ほど前、上海の下町のとある料理店で
一度だけ対面している。そのときの思
い出を余秋雨さんは中国語版『パイプ
のけむり』の序文に寄せた。



中国の人気作家、余秋雨氏。筆者は、香港のテレビ局が企画した「文明の旅」の途上だった
余秋雨氏にニューデリーで会い、インタビューを行なった

右から李建華氏、余
秋雨氏、筆者、楊晶
さん。2002年夏、北
京の日本料理店で

